

♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

28年 7月 NO. 260

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

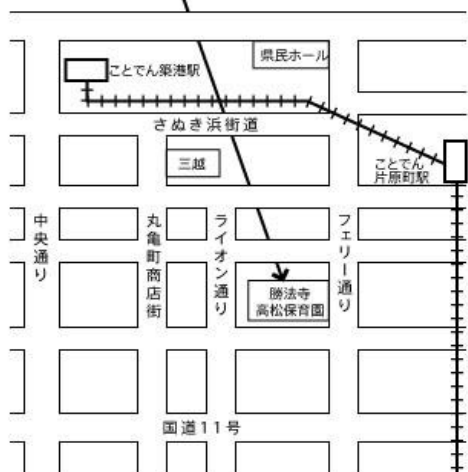
(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		7月の主な活動		～お気軽にどうぞ～	
7月 9日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。		
7月 9日	土	絵本や小物づくり 14:00～16:00	動くペープサート(はばたくカラス)、 画用紙シアター(しりとり遊び)をつくります。		
7月 23日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も育児体験においで下さい。		
7月 25日	月	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	六車健先生(元小学校長)に最近の小学校 事情をお聞きしたり、腹話術など楽しめます。		
7月 29日	金	健康育児相談 11:00～12:00	園医師(小児科)にゆっくり相談できます。 (予約要)		
7月 29日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「あつさに負けない元気な子」をテーマにお話や パネルシアター、大型絵本などあります。		

・火～土の13時～16時までは、園内開放しています
ので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～土) 9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童謡全集 5

星ぞらに暗いよ。
迂を曲がれば
ふうせん、

夏越祭の夜更けよ。

天の川、

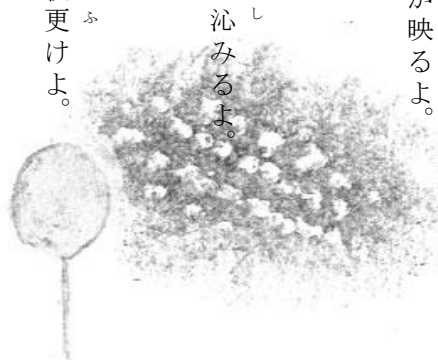
氷屋の声
が沁みるよ。

影灯籠の
人どおり、

瓦斯の灯が
映るよ。

ぽっかりと
ふうせん、

夏越まつり



今月は熊平製作所（金庫やセキュリティシステム製品など製造）の前社長熊平源蔵氏により、社会への感謝、報恩の気持ちから昭和6年創刊された「抜萃のつづり」ーその65ーよりご紹介します。

＊「抜萃のつづり」は、毎年1冊発行し、1年間の新聞、雑誌、書籍などから珠玉のエッセイ、コラムを抜萃し、冊子にまとめたもので、本年度で75冊目。



「育てる」

重松 清（しげまつ きよし）作家

中学生の一人息子を持つ父親・Sさんの話である。なにかにつけて扱いつらい年ごろの中学生、Sさんの息子もご多分に漏れず親や教師に反抗しどおして、Sさん、ほとんど手を焼いて、自分の子育てにすっかり自信をなくしていたのだという。

ある夜、Sさんは息子をこっぴどく叱った。どうして親の気持ちをわかってくれないのか、どうして素直になってくれないのか…。情けなさともどかしさのあまり、Sさん、ついに息子に手をあげてしまった。

すると、息子は猛然と抗議に出た。父親の体罰をなじり、ふだんの口うるささに自分がいかに苦しめられているかを訴えて、こんなふうにした。「文句ばかり言うなよ！俺、生まれて初めて中学生やってるんだぞ！」

Sさん、^{あぜん}啞然とした。^{ぼうぜん}呆然とした。屁理屈にもほどがあるではないか…。

だが、次の瞬間、売り言葉に買い言葉で、Sさんは思わず怒鳴り返していた。「うるさい！お父さんだって、中学生のおまえを育てるのは生まれて初めてなんだ！」

息子もきよとんとした顔になった。お互い言葉が途切れた。ぼかん、と抜けたような沈黙がしばらく流れた。そして一二人は、どちらからともなく笑いだした、という。

親も子どもも、ともに「生まれて初めて」の日々を生きている。いや、人生そのものが「生まれて初めて」の連続ではないか…。

「そう考えると、急に肩の力が抜けて楽になったんだ」とSさんは僕に言った。最近のSさんは、息子を叱るときにも「なんでこんな簡単なことがわからないんだ！」と嘆くのではなく、「お父さんもお前も『生まれて初めて』なんだから、ここできっちりぶつかり合っておかないとヤバいんだぞ！」という気持ちで向き合うようになったのだという。

「育てる」ということを思い描くとき、僕たちはつい、自分をゴールの側に

置いてしまう。一步ずつこっちに向かってくる子どもをゴールで待ちかまえて、正しい道を進むように導くことが、「育てる」ことなのだ、と。

でも、ほんとうはそうじゃないのかもしれない。おとなも子どもも、「育つ」側も「育てる」側も、みんな「生まれて初めて」の日々を生きている。おとなは自分自身の「育つ」を終えてから子どもを「育てる」ことを始めるのではない。おとなだって、育てながら育っている。人生の長い道のりの途上にいることは、おとなも子どもも同じなのだ。

ならば、試行錯誤もあるだろう。失敗して悔やむことだってあるはずだ。かまわないじゃないか、そんなあたりまえですよ—あえて、そう言っておきたい。子育ての「正解」を見つけられない自分を責めて、悩み苦しんでいる親がたくさんいる時代だからこそ。

人生を何度でもやり直すことができるなら、「正解」の数は増えるだろう。でも、それができないから、すべては「生まれて初めて」であり「最初で最後」だから、生きることはちょっと哀しく、すごく愛おしい。

僕は今年「生まれて初めて」四十二歳になる。二人の娘たちも、それぞれ「生まれて初めて」の中学三年生と小学二年生になる。いまはまだまっさらな2005年のカレンダーに、わが家の「生まれて初めて」の日々は、どんなふう刻まれていくだろう。ぶつかったり、すれ違ったり、悔やんだり…家族で笑い合える日が一日でも多ければ、いいな。

中国新聞特集面「教育エッセー」（共同通信配信）



「からだ」 南木 佳士（なぎ けいし）作家・医師

第一線の現場で働く内科の臨床医となって四世紀以上が過ぎてしまったのに、そして、たくさんの亡くなる人たちを見送ってきたのに、いまだに死に関する定まった視点を持ってないでいる。医者になりたてのころ、死は完璧に他者のものであり、こちらはたまたま臨終の場面に立ち会わねばならぬ職業についてまで、やがては慣れるだろうとたかをくくっていた。

中年にさしかかると、日々見慣れたはずの死が、実は自分の背後にそっと迫っているのを知り、^{りつぜん}慄然とした。他者に起こることはすべてわたしにも起こりえるのだと肌身にしみた。本当の大人になるとはこういう大事を知ってしまう

ことなのだろうから、わたしは厄年のあたりでようやく成人したのだ。それからは、自分が存在することそのものが不安で、夜も眠れなくなり、結果として病棟の担当を降りねばならないほど心身を病んだ。

「百歳まで生きたいのでしたら手術しますが、そうでないのならこのまま様子をみたほうがいいのではないのでしょうか」

先日、病棟で、高齢の癌患者さんにこういう話し方をしている医者がいたから、あとで、それはちょっと違うような気がするけどなあ、と一線を退いた身は遠慮しつつ告げた。

毎日外来で多くの高齢者を相手にしているが、九十歳を超えた方には必ずおなじ質問をする。お若いころ、こんなに長生きをすと思っておられましたか、と。答えはすべておなじで、まったく思っていないでした、となる。

だれも、百歳まで生きよう、などとたくらまずに、生活の細部を手抜きなくこなしてきた結果が長寿なのだ。強いて長寿の理由を挙げてもらうと、運でしようかね、との回答が最も多い。

みんな、今日死ぬかもしれない朝にも、自分が死ぬとは思っていない。なぜなら、死のそのときまでは生きているのだから。

ここで急に男と女の話になるが、からだに不調を感じたとき、無理をしないように話すと、それを守るのが女、守れないのが男という傾向はたしかにある。男はからだを理屈でコントロールできると無邪気に信じているかもしれない。総合感冒薬のテレビCMに出てくる、薬を飲めばすぐに会議に出られる、といった単純な物語を好む人も男が多い。こういう無理の積み重ねが男女の寿命差につながっている気がしてならない。

死ぬまでは必ず生きている「からだ」。その圧倒的な存在感のまえで色あせない世俗の価値を探すのはきわめて難しい。

理屈を寄せ集めて世俗の価値を追い求めているとき、その理屈を支えているのがほかならぬ自分の自然なるからだなのだとは自覚できている人を見つけるのも、おなじように困難だ。

かように書きながら悟りきれないわたしは風にふかれるミノムシのごとく、からだのままに揺れている。

あけぼの「男が向きあういのち」